氏　　名	鄭（テイ）　梃（チョウ）　甄（ケン）
学位の種類	博　士　（美　術）
学位記番号	博　美　第 279 号
学位授与年月日	平成22年３月25日
学位論文等題目	〈作品〉山水 〈論文〉自閉症児を対象とした美術教育指導法に関する実践的研究－日本と台湾における調査を基盤として－
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（美術学部）　本郷　寛
（論文第１副査）	〃　准教授　（　〃　）　小松佳代子
（作品第１副査）	〃　〃　（　〃　）　林　武史
（副査）	〃　教　授　（　〃　）　木津文哉
（　〃　）	社会法人嬉泉　常任理事　石井哲夫

（論文内容の要旨）

本論文の目的は自閉症児の独自な造形法を理解し、自閉症児の作品における造形の美しさを生かして一般の人々と共有できるような美術制作を可能にするカリキュラムを構築することにある。本論文は台湾と日本で収集した約2000点の自閉症児の作品を分析し、12年にわたって行ってきた台湾と日本の美術教育の実践、子どもの反応と作品結果を通して、自閉症児・者の美的感覚と概念形成について考察したものである。

第１章では筆者が台湾と日本において病院、自閉症団体、学校など約10箇所の自閉症児の教育現場でその現状を調査した結果を述べた。現在の自閉症の美術教育においては、授業の導入時に視覚構造化が広く使われているが、教育内容としては健常児や知的障害者を対象としたものと区別が付かない点も多く、自閉症児の特質に合わせた具体的な指導法がまだ見られていない状態である。

第２章では、カリキュラム編成の事前考察として、筆者が長庚病院自閉症デイケアセンターから収集した自閉症児約50名1600枚の作品を分析した。作品の造形的特徴としては「繰り返し」や「繰り返しの造形に細部の変化がある」、「動物と人間の合体」、「数字や文字などの記号」などが多く見られるという点では先行研究における結果と同じ特徴が見出された。一方、子どもの発達像の様子をさらに求めるために、８人の自閉症児の２～８年間に及ぶ作品を丁寧に分析していくと、繰り返しの固着性について先行研究とは全く反対の見方を得た。自閉症児の創作の特徴はある時点を一枚の絵の空間で表現することではなく、何年間にもわたる時間軸や連続的な画用紙の空間軸において、「一部固定、一部変化する」手法を用いて「対比性」の美的感覚に基づく創作的な表現が見られることにある。例えば、10枚あまりの作品にわたって主題を固定し、背景を変化させるという主題と背景の対比性、配列された果物について着色の有無を通して存在の有無を表す対比性、点線で昔の写真人物、実線で現在の人物を描いて現在と過去を表す対比性などの例があげられる。また、作品のモチーフでは、対比的な二つの要素を結び付けることが作品の構成において重要な特徴となっている。観察画からみれば、人物の写生や写真模写では、瞳や手足など不対称の構成が多く見られた。時々人体の構成から離れる表現もある。自閉症児の作品では繰り返して描くほどにリズミカルな線の流れや豊かな量感が溢れ、自閉症児は「線の流れ」に対する独特の観察力と表現力を持っていることが明らかになった。

第３章では、台湾と日本での教育実践を通して自閉症児に特徴的な「対比性」に基づく造形活動をさ

らに発展させる具体的カリキュラムについて考察した。台湾の長庚病院及び日本の特別支援学校の実践において、ダンボールの「点の組合せ」による制作は重度と軽度の子どもともに理解しやすいことがわかった。「線の組合せ」を用いてお面の授業は、「変身」、「隠蔽と露出」、「着脱」など多くの対比性の要素を含んでいるので、重度児でも制作時には意欲が高まった。また、同じ授業を２回繰り返し行うと、子どもの能動性が引き出され創作的な作品が見られることもわかった。

個人に対応した有効な指導法は、以下の３点にまとめられる。①事物の概念を形成させる場合は「次元の転換」を通して説明する。つまり、形が描けず、図式画の構成がわからない子どもに、擬声語を出しながら形を描かせ、或いは油粘土で彫刻を作らせてから模写させる。絵の具での色塗りについては、色を色名の文字との組み合わせに転換し色塗りさせる。②技法を高めて想像力を引き出すために「一部固定、一部変化するパターン」の手法を用いる。例えば、立体造形の場合は不完全の型を見本として制作させ、主題の求めに応じて造形を加えさせる。単一の素材の一部を固定すると、子どもは造形の変化に集中しやすい。写真の模写で細部を描かせる場合、写真は一部ずつ露出し、見える範囲を縮小して描かせる。③輪郭線の変化への観察力を高めるために、写真の模写を繰り返して行う。以上のような実践結果から、カリキュラムの全般的な特徴としては「次元の転換－概念の形成」、「一部固定、一部変化するパターン」、「線の流れ」の３つに分類できる。さらに、具体的な特徴として対比性の要素、また子どもの行動に着目した要素を組み入れてカリキュラムを編成することが有効であることを見出した。自閉症児の作品のモチーフは、興味が能動性に関わるので非常に重要な要素である。第４章では以上の実践や分析から得られた結果について述べた。子どもの話と絵の表現によると、数字を好む理由は、数字が多くの事物に対応でき変身する姿が見られるからである。また電車は、「現われると消える」、「動線の流れ」、「照明の点滅」、「両点の結びつき」など対比性の観点を多く含んでいるため自閉症児に魅力的に感じられると推測できる。子どもの拘りの対象物は変えることができないが、対象物に含まれる対比性の要素はカリキュラムの編成にとって重要な点であり、子どもの制作する意欲と表出する能動性を促すことができる。自閉症児の都市風景の記憶画について、定型発達児の建築画の造形法と異なる点は、３点透視法を用いる俯瞰的な視点で全体像の巨大さを表現することにある。そのことは自閉症児の視点が広く移動できるというより、ある視点を固定して対比性の美感を表現することができるからであると考えられる。

自閉症児の「自己中心」とは、美術表現からみると、自閉症児の興味やこだわりに基づくものである。独特な観点で対象物の組合せや配列の仕方によって、元々の事物の特性をなくすと同時に、新しい意味に転ずる。このような対比性の創作モチーフは、老子の思想における「正･反･合」の体現と見られ、事物の本質に戻る力を示してくれる。つまり、自閉症文化の根本は、独自性を持った造形を通して、事物の変貌や視点の転換など対比性の美学を表し、空間軸と時間軸にある対立する二つの要素の結びつきを求めることである。自閉症児の美術教育のカリキュラムの編成において、「対比性」の要素と「一部固定、一部変化するパターン」の指導法を見出し、言葉と視覚構造化を超えて子どもの「理解の獲得」、「興味の喚起」、「造形力の育成」について有効なカリキュラム原理を見出したことが、本論文は重大な成果である。

（博士論文審査結果の要旨）

提出論文は、筆者が12年にわたって台湾と日本でおこなってきた自閉症児に対する美術教育実践をもとに、自閉症児の美的感覚の特徴を明らかにし、そうした考察をもとに自閉症児に適した美術教育の指導法を提案した論文である。まず何よりも、台湾人である筆者が日本語で資料を含めてＡ４判300枚の論文を書いたことに敬服する。内容的に見ても、これまでの先行研究では明らかにされてこなかった自閉症児の美的感覚の新たな特徴を見出しており、オリジナリティ溢れる好論文である。

第１章では、台湾と日本における自閉症児を対象とした美術教育実践現場の具体的な状況を詳細に記述している。第２章では、筆者がこれまで収集した50人の自閉症児の作品、約2000点から自閉症児の美的感覚の特徴について考察したものである。そのうち長期にわたって筆者が関わってきた８人の子どもの作品を詳細に分析することで、「対比性」「一部固定、一部変化のパターン化」「リズミカルな線の流れ」といった特徴を新たに見いだした。特に背景や主題の一部分だけを変える「一部固定、一部変化のパターン化」は、１～７年ものの間をあけて起こっており、長期にわたって同じ子どもに関わり続けた筆者だからこそ見いだせた大発見だと言える。第３章では、こうした自閉症児の美的感覚の特徴に適した美術教育のカリキュラムを筆者が開発し、それを台湾と日本で実際に試行した結果から、自閉症児に適したカリキュラムに必要な要素を分析的に導き出している。第４章では、子どもの作品とカリキュラムの試行結果から得られた知見をまとめ、自閉症児が美術制作の技法を身につけるだけでなくそこから自己表現へと展開するために必要な美術の指導法を具体的に述べている。

自閉症児をめぐる研究はこれまで医学や心理学の分野で蓄積があるが、その多くが行動分析であり、最新の研究もそれをもとにしたコンピューターモデルで自閉症児の発達を促そうとするものである。それに対して提出論文は、自閉症児の美術作品からその内面に着目して、自閉症児が人間として豊かに発達していくための一つの道筋を示している。これまでの研究で指摘されてきた繰り返しやこだわりといった点も、筆者の発見した対比性の視点から見ると、自閉児における造形を通した自己表現の新たな可能性を拓くものとなる。長年の実践経験から得られた圧倒的な作品分析、実際の現場での試行錯誤、そこから得られたオリジナルな発見、こうした点から見て、審査会でも課程博士論文として極めて高い水準にあると評価して、審査員全員一致で合格と判定した。

（作品審査結果の要旨）

提出作品「山水」は、五つの白い大理石の手がそれぞれ違った大きさや表情を持って躍動的に構成されている。それは観者に彫刻を取り巻く周囲の空気が一瞬、緩やかに流れる時空に変貌したかのように感じさせる作品である。本作品は、台湾出身の申請者が日本の文化（日本庭園）を体感し導き出した「水」と、中国の自然感から引用した「山」を融合させ、人間が本来持つ感情の根源を表現した彫刻である。古くから中国にある手を山に見立て「五巖」・「台湾五巖」（五大名山）といった総称や、５の数字の持つ「五福臨門」が家族に福をもたらす諺など、習俗・慣習を援用して、人間と自然との関係から永遠に途絶えることのない生命力を表現している。また、カナダの脳外科医ワイダー・ペンフィールドの学説より体性感覚の面積比から手のサイズの意味を引用し、親しみやすさといった心理作用を呼び覚ますことを目的に、造る手の大きさを決定していることなども独自の解釈で展開している。しかしそれ以上に、この手の大きさから受ける印象は中国の石仏の茫洋とした感覚であり、飾りけのない単純を追求する東洋の姿勢が彫刻の力強さへと変異していることが、より注目される。

申請者は提出論文で12年間の自閉症児・者を対象とした美術教育指導法の研究過程において、自閉症児の作品から「対比性」の美学を見出し、彼らの表現行為には空間軸と時間軸の対立する要素の結びつきが重要であることを詳述している。添付された参考資料にある並はずれた数量の実践資料・図版は申請者の強靭な精神を持って粘り強く行われた考察の痕跡である。この美術教育現場から得られた「繰り返し」、「時間性」といったキーワードは、鄭自身の彫刻作品制作に大きな影響を与えている。特に彫刻空間における時間の意味の再考が、本作品の石の配置に顕著に表れている。観者は五つの手の山をゆっくりと巡りまわる。その時、柔和な表情の手に触れてみたい、座ってみたいなどといった衝動に駆られながら、滔々と流れる大河のごとく悠久の時間を感じる。

本作品は、鄭がこれまでに培った石彫の確かな技術と構造をもとに、長期間に渡って日本と台湾で考究した自閉症児・者の表現の現場から得られた多くの経験によって、現代人が失っている人と彫刻との

関係を見事に蘇らせた秀作である。
以上の結果、提出作品が審査委員一同の高い評価を得て、博士学位授与に十分値すると判断した。

（総合審査結果の要旨）

申請者の鄭梃甄は、台湾からの留学生として博士課程における彫刻実技研究と自閉症児に対する指導法の理論研究に一貫して取り組んできた。
理論研究の成果として、提出された論文「自閉症児を対象とした美術教育指導法に関する実践的研究－日本と台湾における調査を基盤として－」は、筆者が12年にわたって台湾と日本でおこなってきた自閉症児に対する美術教育実践をもとに考察を深め、自閉症児に適した美術教育の指導法を提案したものである。そして、これまでの先行研究では明らかにされてこなかった自閉症児の美的感覚の新たな特徴を見出し、その特徴に適した美術教育のカリキュラムを開発している。
長年の実践経験から得られた圧倒的な作品分析、実際の現場での試行錯誤、そこから得られたオリジナルな発見。そして、自閉症児をめぐるこれまでの医学や心理学の分野での研究に対して、本研究が自閉症児の美術作品からその内面に着目して、自閉症児が人間として豊かに発達していくための一つの道筋を示し、自閉児たちの造形を通した自己表現の新たな可能性を拓くものとなっている。このことから審査会では課程博士論文として極めて高い水準にあると評価された。
博士審査展提出作品「山水」は、台湾出身の申請者が日本の文化（日本庭園）を体感し導き出した「水」と、中国の自然感から引用した「山」を融合させ、手をモチーフとして、人間が本来持つ感情の根源を表現しようとした大理石の石彫５点を空間に配置した作品である。親しみやすさといった心理作用を呼び覚ますことを目的に制作された作品から受ける印象は中国の石仏の茫洋とした感覚であり、飾りけのない単純を追求する東洋の姿勢が彫刻の力強さへと変異していることが注目される。
申請者が提出論文で自閉症児・者を対象とした美術教育指導法の研究過程において収集した並はずれた数量の実践資料・図版は申請者の強靭な精神を持って粘り強く行われた考察の痕跡である。この美術教育現場から得られた「繰り返し」、「時間性」といったキーワードは、作者自身の作品制作に大きな影響を与えている。観者は五つの手の山をゆっくりと巡りまわる。その時、柔和な表情の手に触れてみたい、座ってみたいなどといった衝動に駆られながら、滔々と流れる大河のごとく悠久の時間を感じる。
本作品は、申請者がこれまでに培った石彫の確かな技術と構造をもとに、長期間にわたって日本と台湾で考究した自閉症児・者の表現の現場から得られた多くの経験によって、現代人が失っている人と彫刻との関係を見事に蘇らせた秀作であると評価された。
課程博士学位申請で取り組んだ研究成果は、申請者自身が地道な研究を通してたどり着いた独自のものであり、本人のこれからの制作や研究を進めるにあたり基盤となるものであると考えられる。こうした真摯な研究姿勢が論文執筆と創作研究共に優れた結果に至ることが出来た要因として評価できるところである。
総合審査結果として、提出された論文と作品の関係も加え、一貫した研究の成果が大いに認められる。論文・作品ともに真摯な態度で取り組んだその内容は、美術研究領域にとって貴重な研究であるとともに、論文、作品共に質の高い優れた研究であると高く評価し総合的に合格とした。